

身近な資源を利用した活性化の取組みの効果と持続可能性

—和歌山県古座川町のハナアミを例に—

Study on the effects and sustainability of the revitalization project by local government

- A case of lei making at Kozagawa town, Wakayama prefecture -

○九鬼康彰* 安西美翔**

○Yasuaki KUKI* and Mika ANZAI**

1. 研究の背景と目的 わが国の中山間地域では人口減少や資源管理機能の低下、農林業の停滞等の問題を抱え、さらに若者の減少が著しく高齢化が進んでいる。このような地域活力の低下を改善するためには地域文化の再生や創造が必要との指摘¹⁾や、とりわけ女性高齢者の参加が有効との指摘²⁾がある。活性化の方向は1980年代までの社会資本整備を中心としたハード面での振興から1990年代以降は景観保全や農産物加工といったもともと地域に存在する資源を活かしたソフト的な取組みに変化し、近年はアートプロジェクトのような芸術や観光を結びつけた取組みが盛んである。しかし、全ての地域が際立った特徴の資源を有するとは考えにくい。そこで、本研究では身近に存在する資源から新しいものを創出した事例を対象に、その立ち上げから現在に至る経緯を明らかにすることで取組みの効果と持続可能性、地域活性化に新たに取組む際に留意すべき点を考察する。

2. 対象事例の概要

(1) 町の概要 本研究では和歌山県東牟婁郡古座川町を対象とした。古座川町は和歌山県の南東部に位置し面積294.23km²、森林率95.7%の山村である。町の人口は2000年の3,726人から2010年には3,103人（いずれも国勢調査）と16.7%減少し、2016年4月1日時点でも2,899人（町調べ）とその傾向は止まっていない。高齢化率も48.2%（2010年）と県下で最も高く、深刻である。主な産業はかつては林業であったが、近年は上流でのゆず栽培（2007年度農林水産祭むらづくり部門「内閣総理大臣賞」受賞）の他、シキミやセンリョウ、蜂蜜、ニンニクなどの振興が図られている。

(2) ハナアミの概要 ハナアミとは葉蘭をベースに野草や庭先の花などの身近な資源を活用して作られるリースなどの花飾り、およびその制作行為を指す。これは和歌山県の政策コンペ事業の公募に採択された町単の「花の香りの里づくり事業」をきっかけに2009年に誕生した。ハナアミのアイデアは当時、人事交流で町役場に出向していた農水省のA氏が着想し、住民が楽しくお金を稼ぐこと、ひいては町の活性化に資することを狙いとしていた。現在は5名の女性が毎月1回の練習会の他、母の日やクリスマス向けの注文販売、町役場主催行事への出店、町内の小学校の卒業生を対象とする体験行事などの活動を「ハナアミ乙女」という団体名で行っている。また注文販売はA氏の友人2名がSNSを利用して受注のやり取りを手伝い、小学校での行事はOB1名が学校側との調整を受け持っており、ハナアミ乙女のメンバーはハナアミの制作と発送、指導を担当している。

3. 研究の方法 本研究ではこの活動を立ち上げたA氏と現在のメンバー5名（Table 1）、

*岡山大学大学院環境生命科学研究所 Graduate School of Environmental and Life Science, Okayama University

**岡山大学環境理工学部 Faculty of Environmental Science and Technology, Okayama University

キーワード；地域資源、活性化、山村

外部関係者3名，町役場産業建設課に対して聞き取り調査（2015年7月～12月）を行い，ハナアミのもたらず効果を仮説に従って検討した．また会計簿や補助金の実績報告書などの他，設立趣旨や経緯に関する資料を入手して分析した．さらに，取組みの持続可能性を担保するにはハナアミが趣味として定着していることとメンバーの積

Table 1 ハナアミ乙女の現在のメンバーの属性
Profiles of the lei making circle members

メンバー	年齢	職業	参加時期	参加の動機
B	62	農業	平成22年	潤野区内での呼びかけ
C	77	—	平成22年	潤野区内での呼びかけ
D	61	—	平成24年	B氏からイベント時に教わった
E	40	役場職員	平成22年	活動立ち上げの人物に誘われた
F	37	役場職員	平成26年	E氏から誘われた

Table 2 ハナアミの捉え方の違い
Comparison the views on lei making by age and position

	都市住民 (山野草に触れる機 会の少ない人)	地元住民	ハナアミ乙女のメンバー
若者	花屋などで売っている商品ではなく，自然の植物を使うことに意味を感じ，感動を覚える	身近にある草花も立派な作品になることへの驚き	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみ (B, C, D, F) ・忙しい毎日の息抜き (B) ・脳トレ (C) ・癒し (D) ・気分転換 (E) ・没頭できる時間 (F)
高齢者		<ul style="list-style-type: none"> ・田畑にある厄介な雑草 ・簡単な編み方 ・売り物にしているのか 	

注) メンバー欄のアルファベットは発言者 (Table 1) を表す

極性，交流範囲の拡大の3つが必要という仮説を立てて考察した．

4. 結果と考察 メンバーへの聞き取りの結果，各人はハナアミを楽しみや気分転換と捉えていることから，趣味として定着している点を確認できた (Table 2)．しかし活動の内容に開始以来変化はみられず，メンバーもほとんど増えていない．つまり交流範囲の拡大には至っていないと言える．さらにメンバーの積極性は，次の事情から十分ではないことが明らかとなった．ハナアミは住民の新たな収入源となることを目的に立ち上げられたものの，初期にメンバー内で販売に対する意見の対立が生じ，ハナアミの販売に肯定的なメンバーだけが残る結果となった．対立の背景には住民自身が持つ，商品ではなく作品として贈る方が嬉しいという価値観の他，集落間の対抗意識もあり，それらが取組みの拡大にとって阻害要因となっていた．また出店時に訪れた人とのやり取りや注文販売等で購入した人から寄せられる感想から，山野草に触れる機会の少ない都市住民と地元住民，さらに年齢の違いによってハナアミの捉え方には違いがみられた (Table 2)．ここで地元の高齢者の評価が低い点もメンバーの積極性を妨げていると推察された．また活動の収支は赤字ではないものの，メンバーの報酬は最大で年間26,700円に過ぎず，外部支援者に至っては無報酬であった．ただ，ハナアミそのものは手作りで二つと同じものではなく身近な素材から作られるため，若者を中心とする購入者からは常に高い評価を得ていた．また外部関係者も活動を支援しようとする意識は非常に高く，メンバー自身も内心では多くの人に体験してもらいたいとの前向きな意見を持っていることが分かった．

したがって，このような身近な資源を活用して新しいものを創り出すことは活性化の方策として期待できるが，取組みを持続可能なものにするには住民の販売に対する意識の違いや受容の地域差，経済的インセンティブの付与に配慮と工夫が必要なことが得られた．

謝辞：本研究を進めるにあたり多大なご協力をいただいたハナアミ乙女のメンバーと関係者の皆様，古座川町役場，和歌山県に記してお礼申し上げます．

引用文献 1) 長谷山俊郎 (1996)：地域活力向上のデザイナー—その人と組織，農林統計協会，東京，1-9.
2) 福田恵子，佐藤豊信，駄田井久 (2008)：地域づくり活動における人的資源特性と継続的参加要因の分析—女性の活動者を中心として，農林業問題研究，170，122-128.